外国直接投資による工業化

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

1965年以降の多国籍企業への転換

本部第II章で検討した1965年8月9日のマレーシアからの分離は、初期の戦略の前提を取り去りました。[1] 一つの都市が国内市場だけで産業基盤を築くことはできません。インドネシアの対決政策（コンフロンタシ）によって群島との貿易はすでに断たれており、マレーシアは今や独自の関税を持つ別の国家となっていました。政府は外に目を向けることで対応しました。世界市場向けに製造を行い、その市場へのアクセスを握る企業、すなわち実際には米国、欧州、日本の多国籍企業を誘致することを決めたのです。

この決定は、振り返って見えるほど自明なものではありませんでした。1960年代に新たに独立した国々の多くは、多国籍企業を疑いの目で見ていました。外国資本を植民地的な搾取と結びつけ、国有化や保護された国内の有力企業を好んだからです。シンガポール国内の政治においても、労働組合活動家のジェームズ・プトゥチェリー（James Puthucheary）は、戦略的な重工業は国家が所有すべきだと主張していました。プトゥチェリーは、ウィンセミウスを民間企業の確信的な擁護者として記憶していまし

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

た。ストゥーリンガは、ゴー・ケンスイ（Goh Keng Swee）がこの顧問の見解を共有していたことを示しています。[2] シンガポールの指導者たちは、この都市には自前の実業家を育てる時間がないと結論づけました。外国企業は資本、技術、経営、そして何よりも市場をもたらしたのです。

1967年は転換点となりました。日本、米国、英国、香港の投資家が投資を拡大しました。中国の文化大革命に触発された1967年の香港暴動を受けて、数百の香港企業がより安全な拠点を探し始めました。経済開発庁（EDB）はニューヨークに事務所を開設し、同事務所は4か月のうちに米国の製造業者から約100件の照会を受けました。その多くは半導体企業でした。潜在的な投資家からの申請は、1967年の1,174件から1968年には1,300件に増加しました。[3]

パイオニア・ステータスと1967年経済拡大奨励法

投資判断に影響を与えるために用いられた主要な手段は、税制優遇措置でした。1966年だけで、新たに登記された26社が5年間の免税期間を伴うパイオニア・ステータス（pioneer status）を取得しました。政府は、これらの企業が本格生産に入れば1万9,000人の労働者を雇用すると見込んでいました。1967年、立法府は1959年の条例に代えて経済拡大奨励（所得税減免）法（Economic Expansion Incentives (Relief from Income Tax) Act）を制定しました。同法は優遇措置に関する法律を統合し、その後の優遇措置の枠組みとなりました。同法は1967年12月15日から施行されています。[4]

同法の構造には、開発国家の論理が反映されています。大臣はある産業とその製品をパイオニア産業に指定することができ、その後、企業はパイオニア証明書を申請することができます。現行の規定では、パイオニア企業の減免期間は通算15年を超えることができません。[5] したがって、この優遇措置は裁量による付与です。企業と政府機関との間で個別に交渉され、

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

政府機関は投資、雇用または事業活動に関する条件を付すことができます。同法はEDBに強力な交渉手段を与えることで、投資家と国家の関係を契約上のパートナーシップへと変えたのです。

1970年代後半のある政府高官は、その根底にある考え方を単純な算術で説明しています。1980年の国際租税会議で彼が述べたところによれば、法人所得税率が40%である以上、課税の第一定理は「少ないほど多い（less is more）」というものでした。ゼロの40%はゼロだからです。[6] 国家は、新たな投資をそもそも獲得するために、そこから得られる税収を放棄しました。その投資が生み出す賃金、取引先企業、そして後に課税対象となる利益を当てにしていたのです。

テキサス・インスツルメンツとエレクトロニクス・クラスター

1968年のテキサス・インスツルメンツ（Texas Instruments）の進出は、EDBの創業伝説となりました。1991年にリー・シェンロン（Lee Hsien Loong）が語ったところによれば、同社はシンガポールについてほとんど知らず、現地の労働者がエレクトロニクスの組立ラインに必要な技能と規律を備えているかどうかを疑っていました。EDBの職員は訪問者をかつら工場に案内しました。そこでは若い女性たちが、髪の毛を1本ずつ根気よくかつらに縫い付けていました。納得したテキサス・インスツルメンツは、事業の決定から最初の半導体の生産まで、わずか50日で事業を立ち上げました。1969年7月4日に工場が正式に開所したとき、すでに1,000人の労働者が雇用されていました。[7]

その後、他の半導体・エレクトロニクス企業も続きました。米国からはナショナル・セミコンダクター（National Semiconductor）、ヒューレット・パッカード（Hewlett-Packard）、ゼネラル・エレクトリック（General Electric）、フェアチャイルド（Fairchild）が、日本と欧州からは日立、フィリップス（Philips）、シーメンス（Siemens）が進出しました。ス

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

トゥーリンガは、リンダ・リム（Linda Lim）の研究に依拠して、その成果の規模を示しています。1975年には91社のエレクトロニクス企業が4万6,247人を雇用しており、これは工業労働力の5分の1に当たりました。1980年には185社が7万1,727人を雇用していました。1991年までに、シンガポールは世界のウィンチェスター・ディスク・ドライブの半分以上を生産していました。リー・シェンロンはこれを「EDBの努力によって生み出された、人為的な競争優位」と呼びました。[8]

投資の後には訓練が続きました。EDBはインドのタタ（Tata）、ローライ（Rollei）、ブラウン・ボベリ（Brown Boveri）、フィリップスと共同で訓練センターを設立し、その後、日本・シンガポール、ドイツ・シンガポール、フランス・シンガポールの各技術院が設けられました。ドイツのカメラメーカーであるローライとフィリップスは、1970年代初めにこれらのセンターのうち二つの設立を支援しました。これらのセンターは、正規教育をほとんど受けていない労働者を、多国籍企業の工場での仕事に備えさせるものでした。[9] 外国企業を呼び込み、その存在を現地の技能形成に活用するというパターンは、EDBの手法の恒常的な特徴となりました。その後継となる人材プログラムについては、第J部第IV章で検討します。

1968年の再編：EDB、JTC、DBS

成功は経済開発庁に過重な負担をもたらしました。1968年、政府はその機能のうち二つを独立した機関に分離しました。ジュロン・タウン・コーポレーション（Jurong Town Corporation、現JTCコーポレーション）は1968年6月1日に設立され、工業団地の開発と管理を引き継ぎました。EDBの産業金融を引き継ぐために1968年7月16日に設立されたシンガポール開発銀行（Development Bank of Singapore）は、1968年9月1日に業務を開始しました。[10] EDBは投資誘致を中核業務として維持しました。

この再編によって生まれた分業体制は、今なおシンガポールの経済行政を形づくっています。ある機関が立地を売り込み、別の機関が土地と建物を提供し、三つ目の機関が事業に資金を供給するという体制です。いずれも

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

独自の設置法、予算、経営陣を持つ法定機関（statutory board）であり、省の政治的指揮の下で業務を行います。このモデルにより、政府は管理権を手放すことなく商業的な手法を用いることができました。またこのモデルは、続く各章で検討する金融機関への道も開きました。DBSは第D部で論じる三大地場銀行の一つとなり、同じ年に開設されたオフショア市場は本部第IV章の主題です。

注

1. SG101, “1959–1965: Early Economic Strategies”、前掲：シンガポールは1965年8月9日にマレーシアから分離した。 ↩

2. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、224頁。J. J. Puthucheary へのオーラル・ヒストリー・インタビュー（National Archives of Singapore, reel 10）を引用。同インタビューでプトゥチェリーは、ウィンセミウスが「was very much a private enterprise man」であったと回想している。 ↩

3. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、328〜329頁。Chan Chin Bock, “Romancing the American MNCs”, in Chan Chin Bock et al. (eds), *Heart Work*, Singapore, 2002, 32〜53頁（44頁）を引用。香港企業が「relocating their operations to Singapore to get away from the strikes, the bombs and general chaos」したことについて。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、329頁。Lee Soo Ann, *Industrialization in Singapore*, 63頁を引用。 ↩

4. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、328頁。EDB Annual Report 1967を引用。Speech at the sixth International Tax Conference、1980年2月、前掲、3頁：「In 1967, the Economic Expansion Incentives (Relief from Income Tax) Act was passed to replace the earlier legislation and to consolidate the laws.」。Economic Expansion Incentives (Relief from Income Tax) Act 1967。Singapore Statutes Onlineからlawplayer.comに転載

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

されたもの（2026年11月最終閲覧）：「In operation from 15 December 1967」。 ↩

5. Economic Expansion Incentives (Relief from Income Tax) Act 1967, ss. 3–6。lawplayer.comに転載されたもの（2026年11月最終閲覧）：s. 4（パイオニア産業の承認）、s. 5（パイオニア証明書）、s. 6(1)および(3)（通算「not exceeding 15 years」の減免期間）。 ↩

6. Speech at the sixth International Tax Conference、1980年2月、前掲、4頁：「40 per cent of zero is zero, 40 per cent being the Singapore income tax rate on corporation profits」。 ↩

7. Speech by BG Lee Hsien Loong、1991年8月1日、前掲、3頁：事業は「got off the ground within 50 days flat, from date of project commitment to the production of the first batch of semiconductors and integrated circuits in Singapore」。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、329頁：1969年7月4日に1,000人の従業員を擁して工場が正式に開所した。 ↩

8. F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、329頁。Linda Lim, *Trade, Employment and Industrialization in Singapore*, Geneva, 1986, 87頁を引用。Speech by BG Lee Hsien Loong、1991年8月1日、前掲、10頁：シンガポールは「the dominant producer of Winchester disk drives in the world, accounting for more than 50 per cent of world output」であった。 ↩

9. Speech by BG Lee Hsien Loong、1991年8月1日、前掲、9頁。F. Stoelinga, *Albert Winsemius*、前掲、322頁および378頁。 ↩

10. Wikipedia, “JTC Corporation”（2026年11月最終閲覧）：1968年6月1日にジュロン・タウン・コーポレーションとして設立。SG101, “Jurong: From Swamp to Suburb”、前掲：その任務は“later passed to Jurong Town Corporation (JTC), which was set up … in 1968”。Wikipedia, “DBS Bank”（2026年11月最終閲覧）：EDBの産業金融の責務を引き継ぐため1968年7月16日に政府により設立され、1968年9月1日に業務を開始。Wikipedia, “1968 in Singapore”（2026年11月最終閲覧）。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com